

## ロシアのニコライ一世の時代

平竹傳三 譯

### はしがき

ロシア最近世史に關する文獻は、淺學なる譯者の篋底に存するカタログのみに據るも、無慮二千有餘に達し文字通り汗牛充棟の諺に相當する程であるが、併し夫等の研究對象は何れも局部的に制限せられて居り、近代ロシアの歴史を一貫して之を體系的に記述せるものに至ては纔かに指を屈するに過ぎない。今茲に譯出せんとするロージユコフの「ロシア最近世史」は、最近世ロシアの史的諸相を公平無私なる批判的觀點に依て最も簡潔平明に解剖叙述したる點に於て其の特色を有するものである。

ロージユコフ教授は、一九一七年の大革命當時はペテルブルグ大學史學科教授の職にあり、史家として且又た文明批評家として既に名聲轟々たるものがあつた。當時の彼は、メニシエキイ理論家として獅子吼し、本原著も其の時代の著述（一九一八年版）に成れるものである。従て左右兩極端の觀點から夫々に記述されたるロシア文獻の中に於て、ロージユコフの著作は最も嚴正公平なる史的理念の所産として見做し得られるであらう。尙、彼の著作として「社會學的に考察したるロシア

史」「ロシア解説」「ロシア經濟史概論」「ロシア經濟史概論」及び「ロシアに於ける於ける獨裁權の起原」等、顯著なるものものも尠くないが、茲では前記の「ロシア最近世史」の第二章ニコライ一世時代を要約紹介することにした。(譯者)

## 1、十二月黨の反亂

アレクサンドル一世には嗣子が無かつた。そこで彼の父なるパーセル一世に由つて制定せられた皇位繼承法の一箇條には、皇帝にして若し嗣子無き時は其次弟が帝位を繼承す可しと言ふ規定が制定されて有つたからして、此箇條に則れば即ちアレクサンドル一世の次弟なるコンスタンチンが踐祚す可き筈であつた。併し乍ら同帝位繼承法の他の一箇條には、皇子と雖も皇族の女を娶らざる者は皇祚を踐む事能はずと言ふ規定が制定されて有つたが故に、此箇條に依ればロシアの皇室に取つては臣下に當たるボーランド皇室の皇女を妻にして居たコンスタンチンは遺憾乍ら其資格が無い譯であつた。當時アレクサンドル一世は重患に冒されて刻々死に瀕してゐた爲、速かに帝位の繼承者を決定すべき必要に逼られてゐたので有るが、コンスタンチンは右の理由に依つて夙に帝位繼承の意志無き事を宣言して居たのである。が、併し乍ら何故か彼の否定宣言は秘密にされて公表せられ無かつた。其處で以上の如き規定に則れば此際は結局コンスタンチンの次弟なるニコライが踐祚す可き順序になつたので有る。併しニコライは此帝位繼承問題が公に解決せられる迄何等積極的な意志を表明し無かつたのであるが、其間に凡そ一箇月半の時間が経過した。此凡そ一箇月半の間を通じて當時の政界には模模糊糊たる風潮が瀰漫してゐたのであるが、所謂十二月革命黨なるものは、斯かる風潮を利用して一八二五年十二月十四日ペテルブルグに於いて遂に事を擧げたのである。

かの一八一五年のナポレオン戰役に從軍せる士官連——彼等は何れも貴族階級出身の當時に於いては最も尖端的な青年であつたが——此等の青年士官は此大戰に際してロシア政府の採つた處置は全く誣謬百出の爲體に過ぎず、ロシア國土は取りも直さず國民それ自體の自發的活動に據つて救済されたもので有ると言ふ確信を抱懷して歸還したのであつた。彼等はフランスや將たドイツに於ける滯營の間に、これらの祖國なるロシアよりは遙かに長足の進歩を遂げて居る處の此等の西歐諸國の政治組織及び社會組織を看取したのである。此等西歐流の政治組織及び社會組織を對象としてロシア國內のそれを觀察した時、彼等の心底に澎湃として生ずるものは熾烈なる憤懣の念であつた。其處では農奴制度の羈絆下に全農奴大衆が慘澹たる苦境に沈湎し、政府の顯官は權力を濫用し、諸々の役人は殘忍苛酷なる態度を以て部下の小役人を苛斂誅求してゐたので有る。彼等に取つては又イギリスが其自由なる政治組織を以てかの天才的な、勢力的な、勇猛精悍なるナポレオンの獨裁政治に對抗し得た事も大いに學ぶ可き事であり、且又ナポレオン失脚以後のフランスが國民の一部を代表するに過ぎぬ議員ではあつたが、兎も有れ其等の議員によつて兩院を組織せしめて新法律の制定に努力して居た事も頗る垂涎の情を喚ぶものであつた。

そこで其等の貴族階級出身の青年士官の中、特に前衛的な人々は、ロシアの政治組織をして西部歐羅巴のそれに接近せしめんが爲、先づ憲法の發布を實現せしめんとした。彼等は斯かる目的を以て、一八一七年ペテルブルグに於いて「救済同盟」なる結社を組織したのである。是は近代ロシアにおける最初の秘密結社であり、創設の當初にあつては政治改革の上に甚大なる貢獻をなさんと企圖したものであつたが、併し實際には何等顯著なる功績も残さなかつたのである。此『救済同盟』が失敗裡に解散すると、間も無く「福祉同盟」なる第二の秘密結社が

組織されるに至つた。是は主に前記の救済同盟の幹部連が再舉を計らんとして創設したもので有つたが、併し此結社も實際に於いて殘した功績は比較的鮮少なものであつた。即ち其功績は近衛聯隊における從來兎もすれば確執が生じ勝ちで有つた士官達と兵卒達との間に和氣藹々たる空氣を醸成せしめし事、及び、聯隊内に圖書館を創設し士官達をして國家の經濟組織乃至政治組織に關する西部歐羅巴の著作物を耽讀せしめた事位に過ぎ無かつたのである併し乍ら此結社の中には當時尙ほ不誠實な分子が少からず介在して居た爲、幹部連は其内容を一新し更に鞏固にせんとして、一八二一年遂にこれを解散し、其代りに新しく二個の秘密結社——即ちペテルブルグに『北部同盟』を、而して南ロシアの軍團内に『南部同盟』を建設したのである。『北部同盟』はニキータ・ムラビヨフが統制して居たが彼は先づ皇帝の權力を制限して、政治上の實權を、主として貴族階級即ち地主階級より選出されたる議員、及び若干の商人階級選出の議員、及び更に極く若干の農民階級選出の議員に據つて組織せられた議會に掌握せしめ、次に農奴制度を廢止して全農奴を解放し、各農奴に僅々二デシヤチナ宛の土地を分與して、殘餘の總てを地主の所有地たらしめようと言ふ目論見を立てた。是に於て首肯せられる如く此改革案は依然として貴族階級即ち地主階級の利權を擁護するの弊害を蟬脱してゐないが、蓋しそれは元來ムラビヨフは貴族階級の出身であるが爲、流石に彼も不知不識の間に貴族階級の利權を擁護せんとする傾向に墮ちたのである。是に對し『南部同盟』の有する改革案はより進歩せるもので有つた。當時『南部同盟』はベステリが統轄して居たが、彼は純然たる共和主義を標榜してゐた。即ち彼は先づ皇帝の權力を徹底的に破壊して、政治上の實權を全國民の眞正なる代表者に據つて組織せられた政府に掌握せしめ次に農奴大衆を解放して全國土の半ばを彼等に分與し殘餘の一半を地主階級に讓與しようと言

ふ計劃を樹立した。

かくて一八二五年十二月十四日の朝になりニコライ一世が踐祚す可き宣言が公にされた時、『北部同盟』の一黨はペテルブルグに於て愈々事を舉げたのである。即ち彼等はペテルブルグにおける元老院前の廣場に殺到し、且つ彼等と志を同うする近衛聯隊の全兵員を此場所に出動せしめた。かれらは何れもコンスタンチンをして即位せしむ可き事、而して即時憲法の發布を實現せしむべき事と言ふ二箇條のスローガンを絶叫した。此時ペテルブルグの總督なるミロラードキチがニコライ一世の訓戒令を携へて馳せ着けたが、彼は忽ち十二月革命黨の一員なるカホフスキイの爲に銃殺されて仕舞つた。そこでニコライ一世は直轄の騎兵隊を出動せしめて此暴徒を鎮壓せしめんとしたが併し其騎兵隊も瞬く間に撃退されて了つた。かくてニコライ一世は萬策盡きて遂に最後の手段に訴へ、砲兵大隊を派遣して轟然たる砲火の威力に依つて漸く此暴徒を鎮壓したのである。

これより二週間の後南ロシアの『南方同盟』が舉兵した。當時ベステリは已に捕縛されてゐたが爲、此時の舉兵はムラビヨフ、アポストル及びベストウーヂエフ、リユーミンの二人が其首腦と成つて居たのであるが、此處でも前者と同じく轟爆たる砲火の威力に據つて遂に鎮定されたのである。

此暴動が終結を告ぐるやニコライ一世は直ちに其落武者の搜索に全力を瀝いだ。彼は自ら探偵、豫審判事の總元締たる役割を演じて須臾も追求を懈らなかつた。而して彼は其等の落武者の捕縛に先立つて、既に高等法院長のドイビツチに豫め罪狀の判決を口授して居たのである。判決の結果は、ベステリ、ルイレーエフ、ムラビヨフ、アポストル、ベストウーヂエフ、リユーミン、カホフスキイ、以上五名の首領が縊刑に處せられ、其他の者は、苦役、

流刑、終身懲役等の如き刑罰に處せられた。此時處刑せられた黨員の全數は一二一名であり、其等の中一八五六年アレクサンドル二世發布の赦免狀に接してシベリアより歸還し得られし期日迄で生命を持続し得た者は纔か二十九名に過ぎなかつた。

## 2、ニコライ一世の性格

<sup>デラフリス</sup>十二月革命黨の反亂は從來の如く貴族階級が一丸となつて獨裁政治と農奴制度を擁護して居た時代が最早過去つて仕舞つた事を證示してゐた。尤も此時代に於いても尙ほ農奴制度を固守せんとする努力が行はれては居たが、併しそれは絶望的な最後の努力に過ぎず、斯かる運動には貴族階級の一部なる頑迷苛酷怯懦な老朽運のみが携はつて居たので有る。此等の老朽連は尙も社會と民衆との獨立自由<sup>エ</sup>に對して偉大なる恐怖を感じて居たので有る。

ニコライ一世は取りも直さずかゝる人々の數に入る人物であつた。ニコライ一世の性格に窺はれる主的感情は當時の頑迷なる一部の貴族階級に共通してゐた處の自己の存在保存の念より生ずる恐怖感であつた。彼は夙に幼少の時代から極端なる臆病癖を有して居て、母親を畏れ、射撃を恐れ、雷電を怖れ、豪雨を懼れたものであつた。此先天的な臆病癖は諸々の教育掛の遣方によつて益々發達させられて仕舞つた。即ち其等の教育掛は餘りにも嚴格に失して絶えず彼を吐責し毆打し、就中ラムズドルフ將軍の如きは彼を壁面に押附けて頭部を強烈に毆打し一時彼をして人事不省に陥らしめた程である。が、併しニコライは臆ては自分に帝權を獲得すべき幸運が運合はせて來る事を竊かに認識してゐたが爲、敢て何らの反抗的態度に出で様とも仕なかつた。後年の彼は少なからず頑迷なる一部の貴

族階級を懼れてゐたのである。例へば彼は一時農奴問題の改善を志して其對策を講ぜんが爲、秘密委員會を招集せし事があつたが、其委員會の空氣に依つて、農奴問題の改善は一部貴族階級の憤懣を買ふの結果になると言ふ事を悟るや否や直ちに改善の意志を全く放棄して仕舞つた程である。が、併し彼に取つては實際の處此一部の頑迷なる貴族階級よりも寧ろ一般農奴大衆の方が著しい恐怖の對象であつた。とは言へ此問題に就いては在來の農奴制度を固守しさへすれば、其等の頑迷固陋な貴族達——彼は此種の貴族達を『信頼す可き警察長官』と言ふ綽名を以て稱してゐたが——即ち此種の貴族達が農奴大衆の反亂を看視して呉れるで有らうと言ふ考へに據つて恬然として安んじて居たのである。そこで彼にとつて結局最大なる恐怖の對象となつてゐたものは、諸々の自由主義者、即ち立憲運動の捧持者であつた。彼が十二月革命黨の密武者の搜索に際し自ら探偵、豫審判事の總元締たる役割を演じた事も即ち斯かる最大なる恐怖の念慮に胚胎して居るのである。故に彼は一般の大學生に對しても虎視眈々たる猜疑の眼を以て臨み、且つ臆て全歐羅巴における總ての革命運動を彈壓せんとするの方策にも出でたのである。十二月革命黨反亂の記憶は終世彼の頭腦の中にこびり付き、不斷にかれの心膽を寒からしめしもので有つた。その證據には彼の全生涯を通じて恐るべき自由主義運動の閃光に屢接した時、彼の口からは始終『噫、これも十二月十四日の輩だ！』と言ふ言葉が迸出でた位である。

ニコライ一世に取つて、自己の存在を保有すべき最上の方法ば、全露を軍隊的規律のもとに一括し、海内の全生物をして自己に盲目的に服従せしめる事であつた。而して此目的を達せんが爲には、先づ軍隊内の規律を完成せしめ、惹いて其影響を全國に及ぼすに若くものは無いと考へたのである。彼の軍事教練に對する偏愛性は即ちかくの

如き考へより生じたものである。が、併し彼は斯く軍事教練を偏愛したと雖も、實際の處軍事乃至戦争そのもの、本質を愛好したのでは無く、彼が偏愛したものは實、號令とか行軍と云ふ様な單なる軍事的外形のみで有つた。即ち之を適切に言はんには彼自身の言葉に據れば、『何等の自覺も無ければ勿論反駁も無き處の盲目的服従に基礎を置くところの軍規』なるものを、斯の如き軍事教練に據つて培養せんとしたので有る。故に彼は軍事教練を頗る愛好したものであり、其結果、かれ自身も其軍事教練の上に著しい熟練と智識とを有するに至つて居た。例へば彼は軍團に行幸した際、其練兵場に於いてかれ自ら銃を手にして操銃教練の型を示した事が屢々有つたが、その際における彼の操銃教練振りは上等兵と雖も到底及ばない程であつた。彼は亦宛も此世に鼓手となる爲に生れて來たもの、如く鼓術の方面においても驚嘆す可き程の熟練さを示して居た。

ニコライ一世は取りも直さず以上の様な軍規的見解を以て、凡ゆる行政方針に對し、農奴制度に對したのである。是はかれが臨終の際に皇太子に向つて述べた處の『今や爾に指令權を讓る可し』と言ふ言葉によつて明かに首肯せられる。彼は其執政の全年を通じて全行政官吏は己に盲目的に服従す可きが當然であると言ふ考へを以て諸々の部下の官吏に對して居た。即ちかれは其手記の中に『余は部下の何者と雖も萬一にも余の命令通りの行動を採らざる時は、其者に余の命令が眞實に傳達されて居らざりしものと解釋するの他無し』と言ふ事を記述して居るので有る。

諸者諸君、自己の存在維持の爲不斷に戦々兢兢々として居る種類の人間は、仇敵に對して如何なる態度を採るもので有らうか？ 此種の人間は萬一その仇敵が強力にして自己の立場が危険である時は、只管偽善的、虚飾的態度を以て仇敵に阿諛迎合するもので有るが、併し萬一にも仇敵の勢力が微弱にして且つ自己の掌中に其活殺の權を掌握

した時は、忽ち態度を豹變して殘忍苛酷極まる方針を以て臨むもので有る。

ニコライ一世は即ち常にかくの如き態度を保持してゐる。た是は高等法院に於て十二月革命黨の落武者を裁判した時の彼の態度によつて明かに觀察する事が出来る。即ち先づ其黨員の首脳部が捕縛されたに過ぎずして、且つ全黨員の姓名と所在とが未だ判明するに到らず恐怖滿々たりし折の彼の態度を観るに、彼は先づ其巨魁の一人なるトゥルベツキイに對しては『貴君の如き名門の出身が左様な醜事件に携はれるは家門の辱で無いか』と言ふが如き婉曲な言葉を以て軽く叱責するに留め、ルイレエフ及びオボレンスキイに對しては彼等の家庭的愛執の念を利用して前者には其妻に二千留の慰謝金を贈與し、後者には其父親よりの手紙の手渡しを許可して此兩者に偽善的恩恵を與へん事に務め、カホスキイに對しては彼の愛國の熱辯に虚飾的な涙を流して、『貴君は稀に見る愛國の志士である』と稱してかれに諂ひ、ペステリに對しては出來得る限り減刑すべしと公言して彼の意を迎へん事に務めたのであるが、以上かくの如き彼の阿諛的態度は何れも此等の巨魁をして全黨員の姓名と其所在を白狀せしめんとするの意圖より出でたものに他無らなかつたので有る。斯かる彼の策略に瞞着せられて、カホフスキイ、ルイレエフ等は遂に全黨員の姓名と住所とを白狀するに至つた。ニコライ一世は忽ち態度を一變して、先づカホフスキイを——彼は當時病態で有つたに拘らず——陰慘なる水牢に下し、尋いで嘗ては出來得る限り減刑せん事を公約した人々をも極刑に處したのである。

夙にニコライ一世は幼年時代から遊戲の際には始終何者かを相手に喧嘩騒ぎを追始めてゐた。聽て稍成長して少年時代になつても、其粗暴な性質は矯正され無かつた。かくて長ずるに及び彼の性格は、何者にも愛され無い様な

冷淡にして峻厳苛酷なものに成つて了つた。ミロラドウィッチは彼に對して次の如くに苦言を呈してゐる。『殿下よ殿下を敬愛する者は皆無なる事を知り給へ』

ニコライ一世は又少年時代から聊かも好學がなかつた。彼は講義を聴き乍ら絶えず欠伸を仕たものであり、且つ自發的に讀書した事は全々無かつたのである。彼は又歴譜譜を弄したが、併し其譜譜は頗る下劣なもので、それを耳にして苦笑した者は嘗彼自身のみで有つた。

一口に言へばニコライ一世は自己の存在と權力保存の爲に絶えず戦々兢々とし、而して其恐怖心を全國民に盲目的服従と只に教練にのみしか適當しない様な形式一片の規律を強ふる事とに依つて陰蔽せんと仕た處の無教養無知識な人物で有つた。即ち彼は獨裁政治と農奴制度無くしては到底一日も世渡りが出来無い種類の人間だつたのである。此點に於いて彼は當時の頑迷固陋な一部の貴族階級の心理に全く一致して居たのである。

### 3、ニコライ一世の内政

以上の様な状態で有つたからして、ニコライ一世の内政方針が自然農奴制度と獨裁政治の内容を確立する事に向つて方向附けられて居た事は當然の結果として首肯せられる。此時代には最早農奴制度は夙に時代遅れの制度と云ふ觀があつたことは明かである。其證據にはこの時代になると農民の一揆が瀬々として勃發してゐる。其等の農民一揆はニコライ一世三十年間の治世を通じて、大規模な性質のものゝみを總括してと無慮五六件に止る程であり、其等は屢々地主及び農民監理者の殺害乃至地主の邸宅に對する放火を作ふのが常で有つた。ミンズニコライ一世は何

等かの方法を講じて此瀬々たる一揆を根絶乃至少くとも減少せしめねば成らなかつた。彼は斯かる目的のために政府の官吏及び地主を以て組織せられた秘密委員會を屢招集して其對策を講じたのである。併し乍ら我等の秘密委員會は何れも無爲無能にして何等農民生活の改善に資する處無くして終つたので有り、只一八四二年に至り漸くにして發布せられたかの不徹底なる農奴條令——キセーレフ伯の發案に據る——の起草に携はつた處の委員會のみが多少の意義を包有するものとして認め得られるに過ぎない。

キセーレフは爛眼狡猾なる人物であつた。彼は農奴制度をして更に一日の命數を保たしめるには當に從來の如く彈壓方針のみを採る事は最早愚の骨頂で、此目的を達せんが爲には聊かなり共農奴の經濟生活を改善せしめる事が得策であると言ふ原理を洞察したので有る。詰まり彼はロシアの古諺に言はれる『鱈腹飯を食つた農民は飢えた農民よりも溫順い』と言ふ理窟を應用したのである。そこで彼は農林大臣に任命せられると、先づ『國有地農奴』の經濟状態を改善せん事に着手した。が併しそれは其反面に國有地農奴の勞働生産力に依つて生ず可き國庫の收入を増大せしめんとするの意圖を隨伴して居たものであつた。即ち其證據に彼の在官中を通じ、國有地農奴の年貢納入の總額は前代に比して五分一を増加し、未納入年貢の總額は三分一に減少したのである。次に彼は一般の『地主農奴』の生活状態を改善せんが爲に、かの農奴條令を發案したので有るが、併し此農奴條令の内容は實際の處農奴大衆の眞の解放に資するところの何物をも持つたもので無かつたのである。否それのみならず積極的に言へば、キセーレフは此農奴條令に據つて當時の地主階級に最も時勢に順應した處の有利なる對農奴政策を傳授したので有ると言つても敢て過言ではない。何故なら此農奴條令は地主の全利益を保有し乍ら農奴に對して巧妙なる讓歩を行つた

處の條令だつたからで有る。即ち此條令に依つて農奴大衆には再び地主階級の手より解放せらる可き可能性が與へられたものゝ併し此際に於ける農奴の土地受入條件は前回、即ち一八〇三年に發布せられた農奴條令の場合とは可成り其内容を異にし、此場合の土地受入條件は地主より土地を受入する代りに、其代償として農奴は爾後一定の地主所有の土地を累代無報酬で耕作するか或は若しそれが不可能なる場合は其耕作勞役に相當する用益税(ソボイグ)を地主に累代納入するかの孰れかを遂行す可き義務を負擔されたものだつたので有る。故に農奴大衆に取つては、假令所屬の地主が此條令に違つて解放を行つて呉れた後と雖も、尙ほ一定の地主領土の無報酬耕作乃至それに代る可き用益税の納入と言ふ義務が賦課されて居る譯で有り、且又これ等の義務を遂行し得ざる場合は忽ちにして舊來の如き純然たる農奴状態に變轉せしめらる可き可能性が有つたのである。かゝるが故に此一八四一年の農奴條令は結局農奴の生活改善に何等の貢獻をも致さなかつたので有る。

ニコライ一世の内政に於ては、此農奴條令の發布を除く外には何等の改革も行はれて居ない。凡ては依然として舊態を維持しはに過ぎなかつた。唯一つ斬新なる施設として窺知されるものが、是は獨裁政治を確立せんが爲の目的に據つて成された處の所謂『憲兵團』なるものゝ創立である。此『憲兵團』なるものは一種の政治警察で、其本來の目的は、尾行、家宅搜索、捕縛と言ふ方法に依つて凡ゆる獨裁政治と農奴制度の反對者を殲滅せしめる事にあつた。此『憲兵團』に關しては汝の様な挿話がある。それはこの『憲兵團』の總監に新任せられたベンケンドルフ伯が、爾後採る可き方針の記されたる勅令書を賜はん事をニコライ一世に奏請した時、ニコライは彼に純白のハンカチーフを一枚下賜したと言ふので有る。是は果して何を意味して居たので有らうか。當時獨裁政法の支持者連は

曰く。——これは即ち憲兵團には國事犯人の遺族の涙を拭ふべき義務もある事をニコライ皇帝が暗に仄めかされたので有る——と。併し乍ら此『憲兵團』は實際の處只に其等遺族の涙を拭はなかつたのは勿論の事、否却つて其等の遺族をして益々號泣慟哭せしめるの態度を採つたのである。蓋し純白のハンカチーフは、その表面に何らの規定も條件も記されてゐないと言ふ處からして、『憲兵團』の權力は絶大無制限で有ると言ふ事を意味してゐたのであつた。

斯くの如き憲兵團的精神はニコライ一世の内政方針の凡てを貫通してゐたので有るが、此精神は特に諸學府及び新聞雜誌單行本の如き諸々の出版物に對する方針の上に於いて最も強烈なる色彩を保有してゐた。當時此諸學府及び出版物の方面は文部大臣のウワロフ伯が監理してゐたが、彼はギリシャ正教、獨裁政治、國制保有主義(即ち農奴制度の保有主義)の三個の標的を掲げ、これに依つてニコライ一世の意を迎へんと仕たので有つた。而して彼は自己の監理下に有つた小學校の教師より大學の教授に至る總ての教育者をして全學生の頭腦の中に此等の三思想を培養せしめんと仕た。譬へば彼はモスクワ大學の史學科教授なるバギーデンの講義——即ちロシアの國史は四歐諸國の國史とは其趣きを大いに異にし、ロシア國史の中には後者のそれに窺知し得られ無い夥多の奇蹟が存して居、且つ凡ゆる社會的善事は何れも皇帝の執政より胚胎してゐるものなるが故に、我ロシアの國民は須く皇帝に對し無條件に服従す可きもので有る——と言ふ流義を以てなされた處のロシア國史の講義に對して著しい満足を感じてゐた。當時の全學府、特に大學は政府の嚴重なる監視のもとにあり、其大學に入學し得る者は政府任命の大學總長に依つて認可された學生のみに限られてゐたのである。一方全小學校の生徒には頗る高額なる月謝制度が課定せられ

た爲、今や小學校に入學し得る者は豪商乃至豊裕なる一般市民の子弟に過ぎず、農奴の子弟等は最早小學校にすらも入學し得ざる状態となつた。當時の大學では亦危險思想を培養すると言ふ理由の下に數多の講座が廢止せられ、學生の員數も著しく減少せしめられたので有る。

一方凡ゆる出版物は虎視眈たる検閲官の監視下に有つた。今や出版界に於ては峻嚴なる検閲官の認可なくしては原稿の一行と雖も印刷に附する事が出来なかつたのである。此検閲官なるものには單行本、新聞、雜誌等凡ての刊行物を通じて假令婉曲なる形式に則る共苟くも危險思想と認め得られるものは何等の假借なく告發すべき職權が與へられて居たのである。而して若し文部大臣乃至憲兵團の總監、否皇帝自身が萬一何等かの危險思想と見做さる可き内容を包含せる出版物が江湖に上梓されて居るのを發見した時は、唯心検閲官それ自身が職務怠慢の故を以て處罰せられるのみならず、無論其著者も共に刑罰に處せられるのであつた。或る時常日頃から元來獨裁政治の主張に携はつてゐたにも拘らず三人の評論家がニコライ一世の指命に據つて處罰された事があつたが、是は其等三人の評論家の中或る者が記述した處の論文——其内容は獨裁政治を謳歌し且つ獨裁政治に對してロシアの國民が如何に忠順で有るかといふ事を稱讃したもので有つたが——其論文に關する彼等三人の論争が稍ニコライ一世自身の意に滿た無いと言ふ單純なる理由に依つて處罰されたのである。此時代には發賣禁止乃至強制廢刊の憂目に逢着した雜誌の數は枚舉に遠か無い程に多い。例へば社會評論家チャアデーエフが記述せる論文の僅か或る一行の爲に、其論文を掲載せる雜誌の發行者ナデージュエンは流刑に處せられ、筆者チャアデーエフは狂人と言ふ名目の下に精神病院に幽閉されたのである。此様な状態であつたからして、當時に於いては無節操帶間的著述家連のみが獨り政府

の寵幸を專にするの結果になつた。其等の帶間的著述家の通例者としてはブルガーリン及びグレーチがある。此兩者は政府乃至皇帝に只管阿諛追從した結果、彼等が經營せる新聞『北國の蜂』<sup>シベリヤの蜂</sup>にのみ爾後外國の政事情報を掲載し得可しと言ふ特權を與へられ、之が爲に彼等は莫大なる利益を獲得したのである。かくて爾後の彼等は益々自著の單行本乃至自己發行の新聞雜誌の中において、獨裁政法とギリシャ正教と農奴制度の確立の爲に宣傳の勞を執りその反對に凡ゆる自由思想に對して聞くに堪へざる罵詈謗の聲を浴せ掛けるに至つた。併し乍ら彼等の如き政府の傀儡たる著述家すらも尙ほかの検閲官及び憲兵團の監視と制肘とを免れ得なかつた。例へば憲兵團の副總監なるドウペーリツト將軍は屢々ブルガーリンを些細な事件の爲に檢束し何等假借する處なくして牢獄に下した。かくて一八四八年に至り佛蘭西にかの第三革命が勃發するに至ると、ニコライ一世は其影響がロシアに浸滲し來らん事を懼れて爾後出版物に對する取締方針を更に嚴重にするに至つた。即ち彼は在來の検閲官なるもの、他に、更に特殊の検閲委員なるものを新任し、此検閲委員をして只に一般の著述家のみならず、又在來の検閲官の検閲方針をも取締らしめるに至つたのである。是が爲に夥多の急進的思想家は陸續として司直の手に擧げられるやうになつた。譬へばかの著名なる社會批評家ビエリシスキイは時正に病痾の爲に斃れたと言ふ事を以て纔かに縲紲の辱を免れ得たに過ぎず、プーシキン及びリエルモントフ等は長年月の間、配所の月を眺むるの憂目を味合はしめられた。事態斯くの如くであつたが故に、ニコライ一世治世の晩年は近代ロシアに於て全く其比を觀ざる程に鬱陶暗澹たる時代相を醸成してゐたのであつた。

#### 4、一八三〇—三一年に亘るポーランドの反亂



夙にアレクサンドル一世は波蘭土に民選議會設立の許可を與へた時からして、既に其波蘭土の民選議會なるものに對する自己の態度において、彼は最も己の獨裁權を尊重してゐる事を表明して居た。即ち彼はポーランドの民選議會に對して自己の獨裁政治に盲從す可き事を命令し、且つ其議會開催の度數をして元來憲法に依つて制定されて有る度數よりも更に僅少なものに制限し、且又ポーランド國庫の收入をして只管にかの『神聖同盟』なるもの、外交を支持せんか爲に必要な陸軍の軍備の充實のみに當てしめたので有つた。當時ポーランドには彼の名代としてコンスタンチン太公及びノゴシリツォフ伯が君臨して居たが、此兩者は憲法の規定を無視して、アレクサンドル一世ながらの獨裁政治を行ひ、夥多の憂國の志士を縛して牢獄に投じ、且又檢閲制度を制定して凡ゆる出版物に彈壓を加へて居た。斯くの如き状態はニコライ一世の時代に迄で連續され來つたのである。ニコライ一世はかの十二月革命黨反亂の終結に際し、同革命黨の旗下に屬してゐた處のポーランドに於ける黨員に對して全國の議會が寛大なる態度を以て其罪狀の判決を行つた事に、甚しく憤激したものであつた。

當時ポーランドの貴族階級はロシアの爲政者が波蘭土の民選議會を無視して宛然たる獨裁政治の羈絆を課して居た事に對し熾烈なる不滿を抱いてゐた。且又彼等は對外貿易の代表的貨物なりし國產の小麥をドイツ及び奧太利に向つて輸出するの可能性を剝奪された事に對しても甚大なる不滿を抱懷して居た。是はロシアの政府がかの『神聖同盟』の外交を支持する爲に必要な軍備の充實を許らんとするの目的よりして、其財源を拮出せんが爲ポーランド輸入のドイツ及び奧太利の商品に對して莫大なる輸入税を課した結果、これが當然の歸結としてドイツ及び奧太利もポーランド輸出の小麥に重税を賦課するに至つたからである。これが爲貴族階級及び商人階級は甚大なる打撃

を蒙り熾烈なる憤激の念を抱懷するに至つたので有るが、彼等と共に學生及び青年士官の大衆も此時局に對しては甚く悲憤慷慨した。其處で一八三〇年の七月に至り佛蘭西に於いてかの第二革命が勃發せるを機とし、遂にポーランドの貴族階級商人階級學生青年士官等はロシアに對する獨立を標榜して叛旗を翻したのであつた。此叛亂が勃發するやコンスタンチン太公は形勢非なりと觀て直ちに部下の軍隊を纏めてロシア本國に逃竄した。

茲に於いてポーランドの首腦者連はニコライ一世に對し、かの一八二五年にアレクサンドル一世に依つて許可された處の憲法の條項を爾後嚴正に遵奉す可き事を要求して談判を開始した。併し乍らニコライ一世は元來憲法なるものを甚しく嫌惡して居たので有つたからして、聊かも此要求に應諾し様と仕なかつた。搗てゝ加へて此際におけるポーランド革命の勢力は比較的微弱であつた故に、ニコライの傲岸なる態度は聊かも弛緩しなかつたのである。かくて彼はこの叛亂を鎮壓せしめんが爲に、ドチピツキ將軍を總司令官に任命してポーランドに向つて大軍を派遣せしめ、總てドイビツキ將軍が戦地に於いて虎列拉の爲に病死するに及び更にバスチーキツキ將軍をして其衝に當たらしめた。夙にドイビツキはオストロレンカ市附近においてポーランドの叛亂軍を撃破してゐたが、次のバスチーキツキ將軍は更にポーランド軍に徹底的な打撃を與へて遂に其首都なるワルシャワを占領した。茲に於いてポーランドの叛亂は全く鎮壓せられた。此結果ポーランドは一八一五年アレクサンドル一世に據つて一旦許可せられたかの憲法を全的に剝奪せられ、爾後ロツヤ帝國内の諸地方と全く同様なる行政待遇を受くるに至つたのである。

## 五、ニコライ一世の外交方針

ニコライ一世は以上の如きポーランドに對する態度——即ち先づ全國の叛亂を彈壓し尋いで同國の憲法を破壊して了つたが如き態度において、其内政方針の凡てにおけると同様に、茲でも斷乎として獨裁政治を擁護した事を物語つてゐた。これを換言するに彼は宮にロシア國內に於いて憲兵團の總元締たる役割を演じて居たのみならず、又其外交方針の上においても全歐羅巴の憲兵團の總元締たる役割を演じてゐたのであると謂ひ得られやう。

夙にアレクサンドル一世治世の晩年頃から、トルコ領土の中特に數多のギリシヤ人が居住せし黒海の沿岸地方では風雲只ならざるの形勢が醸成されてゐた。當時此地方の諸都市には夥多の富強なるギリシヤ人の商人が擡頭してゐたが、彼等は此方面における海上貿易の鍵錠を一手に掌握し、從つて此沿岸に於けるロシア貨物の輸出をも一手に引受けてゐた。當時ギリシヤ全土は土耳其の統治權下にあつた結果、此等のギリシヤ人の豪商連は不斷に土耳其人の爲に壓迫を蒙つてゐたので有るが、是がため彼等は絶えず土耳其の羈絆下より脱出す可き機を狙つて居たのである。斯くの如き情勢が昂じた結果遂にギリシヤ人は一齊に蹶起して土耳其に對して獨立を宣言するに至つた。

アレクサンドル一世は元來凡ゆる革命運動を未然に防がんが爲にかの『神聖同盟』なるものを組織した程で有つた故に、此ギリシヤの獨立運動に對しても勿論反對的な態度を取つたのである。而して彼の腹目に依つて次に帝位を繼承した處のニコライ一世も彼と同じく此ギリシヤの獨立運動に對して反對的な方針を取つたのである。が、併し乍らくしてゐる裡にギリシヤは大英帝國の保護と援助とを受くるに至つた爲、ニコライ一世は獨り英國をしてのみギリシヤの保護者たるの位置を獲得せしむるの不利なる事を思ひ、時宛から同様な見解を有してゐた處の佛蘭西と共に各艦隊を出動せしめて英國の艦隊に合體せしめ、聽てナワリシ港の沖合に於て一八二七年土耳其の艦隊

を相手に大海戦を決行した結果遂に後者を擊破して了つたので有る。かくて土耳其の艦隊を粉碎すると、ニコライ一世は更に徹底的に屈服せしめて其領土を獲得せん事を欲し、新たに陸軍を出動せしめて先づ黒海沿岸の土耳其領土の一なるワルナ市を占領せしめた。當時露軍の總司令官はドイビツチ將軍が任命されて居たが、彼はニコライ一世の命に據つて更らに總軍を前進せしめバルカン半島を過ぎてトルコの本國に逼らんと仕たのである。茲に於いて土耳其は萬策盡きて遂に一八二九年アドリアノボルにおいて和議を結ばざるの已無きに立至つたのであるが、此結果ロシアはドナウ河の支流地方及び黒海東岸の全地方を獲得したのである。此戰役終結後ギリシヤは一先づロシアの後見下に自治政治を行ふ可き事に決定された。ニコライ一世は此ギリシヤに嘗てアレクサンドル一世治世の晩年を通じてロシアの外務大臣を務めてゐた處のカボヂスツリヤを其總督として赴任せしめた。このカボヂスツリヤは爾後ギリシヤに於いてロシア本國のそれと同様な形式の獨裁政治を行ふ可しと言ふニコライ一世の内命を受けて居たからして、彼は赴任するや忽ち此内命の實現を計らんとして峻嚴苛酷なる專制的方針を以て萬事を處理し始めたのである。斯くの如き獨裁政治はギリシヤ人の意に全々滿たぬ處であつた。此結果彼は或るギリシヤ人の愛國の士に暗殺せられ、これを機として全ギリシヤ人は一齊に蹶起して爾後純然たる立憲政治を行ふに至つたので有る。かくの如くにしてニコライ一世のギリシヤに對する『憲兵團的外交』は全々失敗に歸して仕舞つた。が、併し此『憲兵團的外交』は一方ハンガリアに對しては多少の成功を納め得たものと謂ひ得られやう。

一八四八年に至ると、フランス、プロシヤ、奧太利匈牙利には各革命運動が勃發した。ニコライ一世はロシアに接近せる此等の諸國において各舊制度が崩壞しつゝある事に對し、怒髮冠を衝くの憤滿を味はずには居られなかつ

た。彼は此等の革命運動が影響を及ぼし其結果ロシアにおける獨裁政治が、否適切に言へば彼自身の存在が危機に陥入れられん事を推想して激甚なる恐怖を感じた爲、此等の革命運動の鎮壓に援助を與へ得らる可き機會が到來せん事を鶴首して待侘びたのである。其機會は忽ちにして到來した。即ち時にアウストリアの皇帝なるフランツ、ヨセフはアウストリアに於ける革命運動のみは漸くにして之を鎮定する事を得たが、併し其屬領なるハンガリアに勃發せる革命運動までは到底鎮壓するの力無き狀態に有つた。其處でニコライ一世は惶惶として兵を出勤せしめてフランツ、ヨセフを援助した。當時露軍の總司令官にはバスケーキツチ將軍が任命されて居たが、彼は一八四九年半ラゴシユ市附近に於いてハンガリアの革命軍を撃破し、かくてフランツ、ヨセフの獨裁政治は再び復活せしめられたのである。

斯くの如くにしてハンガリアの革命運動を平定すると、次にニコライ一世は土耳其の سلطان に向つて援軍を派遣した。これは其當時土耳其の Sultan に對して其屬領たるエヂプトが獨立運動を企てゝ居たが爲、ニコライ一世は速かに Sultan をして其埃及の叛亂を鎮壓せしめんと云ふ表面的理由によつて成されたもので有つた。併し乍らトルコの Sultan はロシアの援軍に對し速かに本國に歸還すべき事を要求したのであるが、蓋し其理由を訊ぬるに Sultan は埃及の叛亂よりも寧ろロシアの援軍そのものを甚く懼れたが爲であつた。即ちニコライ一世は此援兵派遣と言ふ事に附隨して其心底においては火事泥式に土耳其本國のコンスタンチノブル市附近の領土を攫取せんとの野心をも竊かに抱懷してゐたので有る。

ニコライ一世治世の間には今一の戦役が勃發してゐる。是は彼の治世の晩年に生じたもので、頗る曠日彌久的な

性質のものにして、全ロシア國民に偉大なる打撃と損害とを與へたものであつた。此大戦は主としてクリミアのセヴストポリリ市附近を中心として行はれたものであるが故に、通例クリミア戰役なる名稱に依つて廣く人口に膾炙されてゐる。此大戦勃發の導火線は當時ロシア政府の庇護の下にあつたギリシア正教派の僧侶連と、一方フランス政府の保護の下にあつたカトリック派の僧侶連との何れに果してかのエルサレムの聖地聖物に關する優越權が存してゐるかと言ふ問題であつた。併し乍ら此大戦の眞因は斯くの如き問題よりも更に深刻なる事態の上に其根底を置いてゐた。即ち其眞因を訊ぬるに元來フランス及び英吉利はニコライ一世が列國間の種々なる國際問題に容喙して彼一流の獨裁的態度を以て事局を攪亂せしむる事に對し著しい憤懣の念を抱懷してゐた事が最大の原因と成つてゐたのである。當時ニコライ一世は土耳其に對して傲岸不遜極まる態度を以て臨み、同トルコの屬領なるセルビア及びブルガリアがギリシア正教を遵奉せる國で有つた事を理由とし、此兩者をして爾後ロシアに朝貢せしめん事を土耳其の Sultan に強要したのである。これに對し Sultan は斷乎として之を拒絶した爲、其結果一八五四年ロシアトルコ間に先づ戦端が開始されるに至つた。當時ロシアの黒海艦隊はナヒーモフ提督に統率されてゐたが、ナヒーモフは黒海の南岸なるシノプ港の沖合で土耳其の艦艦を撃沈したのである。茲に於て佛蘭西及び英吉利は共に蹶起してロシアに向つて宣戰を布告し直ちに軍を派してクリミアのセヴストポリリを包圍せしめた。ロシアの勢力は此大敵國に比較すれば稍微少稀弱であつた。そこで十一ヶ月に亘る包圍戰の結果、一八五六年に至り——時既にロシアはアレクサンドル二世の時代になつてゐたが——遂にセヴストポリリは陥落したので有る。此大戦の結果締結せられたパリ條約に據り、ロシアは土耳其に對してドナウ河下流の地方を分讓し、且つ爾後黒海において艦隊を有す

るの權利を剝奪されたのであるが、是はロシアに取つて偉大なる打撃となつた。